

令和元年5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04024

研究課題名(和文) 自他の認知の連続性と境界に関する多面的検討

研究課題名(英文) A multifaceted investigation of self-other continuity and boundary in cognition

研究代表者

村本 由紀子 (MURAMOTO, Yukiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：00303793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：(1)行為者の態度の一貫性についての認知が、行為者との心理的距離に応じていかに異なるかを、自己と他者の連続性(自己-親密な他者-疎遠な他者)を視野に入れて検討し、距離が近いほど行為者の態度の文脈を超えた一貫性が知覚されること、自己はいわば心理的距離ゼロの他者として捉えうることを見出した。(2)自己と他者間の認知のズレがもたらす社会的帰結として、集団において誰からも好まれない「不人気な規範」が維持されるメカニズムを検討した。(3)能力の可変性に関する暗黙の信念が、自己と他者との相互作用を通じて形成され、共有されるプロセスを、教育場面における社会環境の諸要因にも着目しつつ検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

他者の信念についての誤った推測が共有され、結果的に誰もが好まない不人気な規範が維持されてしまうメカニズムを精緻に検討することによって、現実場面においてそのような規範を打破するために鍵となる要件を探ることができた。さらに、能力や努力の価値やその可変性に関する共有信念が、周囲の教育学習環境に適応し、他者(教師や親)からの期待に応えるための方略として形成されるプロセスを見出したことで、暗黙の信念に文化差が存在する理由を説明する仮説的な理論モデルの構築を図ることができた。

研究成果の概要(英文)：(1) The present research aimed to investigate how the psychological distance between an observer and an actor would affect the perception of cross-situational consistency in the actor's attitude. The psychological distance was regarded as continuous between the self, close others, and distant others. It was found that the closer the distance with an actor was, the more an observer was likely to perceive the actor's attitude as consistent across situations, and that the self was perceived as the closest other. (2) The mechanism for maintaining "unpopular norms" which are not liked by anyone in a group was explored as a social consequence of cognitive gaps between the self and others. (3) The process of forming and sharing implicit beliefs about malleability of ability through interactions between the self and others was investigated, focusing on social environmental factors in educational settings.

研究分野：社会心理学

キーワード：自己と他者 一貫性の認知 集団規範 多元的無知 暗黙理論

1. 研究開始当初の背景

他者の行為の原因はその人の内的な要因に帰属されやすいのに対し、自己の行為の原因は外的な要因に帰属されやすい。このバイアスは「行為者・観察者効果」として古くから知られる (Jones & Nisbett, 1972)。この概念に代表されるように、自己に対する認知と他者に対する認知は、しばしば対比的に論じられる。ただし、自他の認知的区別は必ずしも自明ではない。「心の理論」が示す通り、人はまず他者が自分と同様の心を持っていると仮定したうえで、他者の心を推察する。近年の脳科学の知見でも、他者理解においては、自他を同一視するプロセスと自他を区別するプロセスの双方が重要な意味を持つことが示されている (乾, 2013)。さらに、こうした自己と他者の認知には文化差があるという議論もある。代表的理論である文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) によれば、欧米の人々は相互独立的自己観を有し、自他の境界を明確に認識するのに対し、アジアの人々は相互協調的自己観を有し、自他の境界が曖昧であるとされる。

一方で、従来の議論においては、自己と他者間の心理的距離のバリエーションやその質的な違いについて精緻な検討が行われてきたとはいえない。これに対して申請者は、自己と他者の関係性の質的な違いを視野に入れて、一連の研究を行ってきた。たとえば、科学研究費補助金の助成を受けて平成 23~26 年度に実施した「関係性の類型と拡張自己評価維持過程」に関する研究では、他者との関係性のあり方を 6 つの構成要素 (Kindred, Companionship, Dignity, Respect, Humanity, Anonymity) によって特徴づけ、それらの要素の組み合わせによって、心理的一体感に根差した関係性、互惠性に根差した関係性等、自他の関係性が質的に区別し得ることを示した。さらに申請者は、こうした関係性の違いに応じて、人が異なる心理・行動傾向を生起させる (具体的には、自己評価維持・高揚の方略が異なる) ことを明らかにしてきた。

このように、自己と他者は必ずしも二分法的なカテゴリーで区別し得るものではなく、心理的距離のありように応じて連続的なグラデーションを想定することが妥当である。もし、自己と他者を、こうした連続帯上のさまざまなポジションに配置することが可能だとすれば、自他に関する認知のバイアスの大きさもまた、それと対応して連続的に捉えうるのだろうか。そのような自他の認知のズレの大きさの違いは、社会的にいかなる帰結をもたらすのだろうか。本研究は、こうした問いの探究を通じて、自他の心理的境界がどこにあるのか、それはどの程度明確なものであり得るのかという問題に少しでも近づいていくことを目指して開始された。

2. 研究の目的

上述のような研究の流れを踏まえ、本研究は、複数の方向性からのアプローチによって「自己と他者の境界」に関する人々の認知のありように多角的に迫ることを目的とした。

(1) 自己と他者の社会的距離と態度の一貫性の認知との関連

第一の方向性は、「自己に対する認知と他者に対する認知はどこまで近づき得るか、どこが決定的に異なるか」という問題の探究である。ここでは、自己認知と他者認知のズレやバイアスに関する古典的な概念を、自他の心理的距離の連続性を視野に入れて捉え直すことを目指した。

解釈レベル理論によれば、時間的距離が近いほど思考は具体的に、遠いほど抽象的になりやすいとされる。これを踏まえて時間的距離と対応バイアスの関連を検討した Nussbaum, Trope, & Liberman (2003) の研究では、参加者に他者の 3 日後の態度と 1 年後の態度を推測するよう求めた。すると、後者においては文脈要因が軽視されて他者の属性推測がより強く行われ、異なる状況の下での当該他者の態度や行動の一貫性が前者に比して強く見積られる、という結果が得られた。この知見を踏まえれば、他者との社会的距離の効果に関しても同様の予測が成り立ち得る。すなわち、他者との社会的距離が近ければ近いほど、文脈を超えた他者の態度の一貫性が推測されにくくなる可能性がある。もしそれが確かならば、社会的距離が最も近い (ゼロである) 自己については、一貫性の認知が最もなされにくいということになる。一方で、人は自己同一性、自己認知の一貫性を保持しようとする傾向をもつことも知られており (e.g., Campbell, 1990)、この知見との整合性は検討すべき課題である。

本研究ではこうした観点から、他者との距離が近づいた場合、当該他者に対する認知はどこまで自己認知に近づき得るのかを検討することとした。自己を心理的距離がゼロの他者として捉えるならば、非常に親密な他者に対する認知は限りなく自己認知に近づくと考えることもできるが、本当にそうだろうか。自他の間に境界を生じさせる要素があるとすればそれは何か。こうした問いを掲げて研究を行った。

(2) 他者の選好・評判に関する誤推測の連鎖と、その帰結としての多元的無知

第二の方向性は、「自己認知と他者認知の間のズレがもたらす社会的帰結は何か」という問題の探究である。ここでは、集団における規範の認知とその維持のプロセスに焦点を当て、自己の個人的信念、および推測された他者の信念が、それぞれ、規範に即した個人の行動をどの程度規定し、ひいては当該の規範そのものを維持する力をもつのかを検討することとした。さらに、自己の信念と推測された他者の信念の間にズレが生じている場合、そのことが当該の集団の生産性や人間関係の維持にどの程度の影響を与えるかについても検討を試みた。

先行研究では、推測された他者の信念が規範や文化の維持に大きな影響を及ぼしているという指摘がしばしばなされている。Zou et al (2009) によれば、集団内の人々が一定の心理・行動傾向を示すとき、その規定因となるのは、個々人に内面化された価値や信念ではなく、むしろ、それらの価値や信念が周囲の他者に共有されているという考え (perceived consensus) であるという。こうした考え方にに基づき、集団主義や相互協調性など、旧来は特定の文化に生きる人々の心のうちに備わった傾向性として捉えられてきた特質が、他者の選好や信念に対する認知の誤解 (多元的無知) に基づくものだとする知見が呈示されている (Zou et al, 2009; 橋本, 2011)。本研究では、自己の信念よりも推測された他者の信念の方が自己の行動を規定する力を持つとすればそれはいかなるメカニズムによるのかを明らかにし、このことを通じて、自他の境界の問題を、マクロな社会にとっての機能という側面から検討することを目的とした。

なお、上記は岩谷舟真氏 (大学院生=当時) との共同研究として立案・実施された。このほか、企業における暗黙の組織風土と従業員相互の認知の様相に焦点を当てた正木郁太郎氏 (大学院生=当時) との共同研究も実施したが、詳細は割愛する。

(3) 自己と他者、個人と社会環境の相互作用を通じた共有信念の形成過程 (発展的テーマ)

第三の方向性は、自己と他者との相互作用を通じた共有信念の形成過程を、社会環境の影響にも着目しつつ、現実場面に即して検証することである。ここでは、教育学習場面において「暗黙理論」が形成され、共有されるメカニズムに焦点を当てた。暗黙理論とは、人の能力の変異性に関する素朴理論であり、人の能力は努力や学習を通じて変化するものであるとする増加理論と、人の能力は生まれつき固定されているとする実体理論の2種類の信念からなる (Dweck, 2006)。増加理論を持つ者は、一つの課題に失敗しても簡単に断念せず、努力の継続によって当該課題に熟達することを志向する。他方、実体理論を持つ者は、一つの課題に失敗するとその課題への適性がないと判断し、能力を発揮できる別の課題を探して移行しようと試みる (鈴木・村本, 2017)。こうした志向性の違いは個人差として現れるのみならず、個人が身を置く社会の構造的な差異を反映し、社会差・文化差として現れる可能性がある。実際、日本は増加理論的、アメリカは実体理論的という暗黙理論の日米差を指摘する知見がある (Heine et al., 2001)。二つの社会の教育学習環境を比較すると、日本の学校教育においては、すべての生徒が同じカリキュラムを同じ進捗で学習し、同じ到達目標の達成が求められることが多い。このような教育学習環境の下では、与えられた課題に粘り強く取り組み、失敗後も努力を続ける増加理論的な取り組み方が有効といえるだろう。一方、アメリカの学校教育においては習熟度別クラス編成や自由度の高いカリキュラム選択が可能であり、個々の生徒が適性に応じた課題に取り組み、成果を挙げることが奨励されている。こうした教育学習環境の下では、失敗した課題に固執せず、自らの能力をより容易に発揮できる課題を見出す実体理論的な取り組み方が奏功する可能性が高いだろう。すなわち、個人の暗黙理論は、教育学習の場面で取り組むべき課題の選択肢がどの程度豊富に存在するか、また課題を途中で変更することがどの程度容易かといった環境の特質と、それぞれの環境に応じた他者からの期待の認知・推測を反映して育まれるという側面を持つのではないかと推測される。こうした予測を検証すべく、研究を行った。

なお、上記は鈴木啓太氏 (大学院生) との共同研究として立案・実施された。

3. 研究の方法

(1) 自己と他者の社会的距離と態度の一貫性の認知との関連

社会的距離の異なる他者、および自己の属性評価の時間を越えた一貫性の程度を検証した。具体的には、Nussbaum et al. (2003) が用いた質問紙をベースにして、①行為者との社会的距離 (自己または他者)、②時制 (過去または未来)、③時間的距離 (遠いまたは近い) を独立変数とし、4つの異なる状況を設定して、それぞれの状況での行為者の態度を推測させた。態度推測には Big Five の各因子に対応する3項目ずつ、計15項目の尺度を用いた。なお、独立変数の①②は参加者内要因、③は参加者間要因とした。さらに、他者の行為に対する評価に際しては、当該他者との関係性や社会的距離を回答させ、親密度の高い他者と低い他者との比較検討に用いた。調査対象者は日本人90名 (うち女性47名; 平均年齢59.2歳) であった。彼らに質問紙を配布して協力を依頼し、一定の回答時間を設けたうえで回収した。ただし、この調査への協力は任意であること、答えたくない設問があれば未記入のままでもよいことを伝えた。

(2) 他者の選好・評判に関する誤推測の連鎖と、その帰結としての多元的無知

実験室内に不人気な規範を作り上げ、他者の選好をどのように推測する者が (自らの選好とは異なる) 規範に沿って振る舞うかを検討した。実験手続きは、Willer, Kuwabara, & Macy (2009) を参考にしつつ、新たに構築した。まず、実験室に5人の参加者が集められた。参加者は1人ずつブースに誘導された後、2つの選択肢から一方を選択する (2種類の水を試飲し、品質の良い方を選ぶ) 課題に取り組んだ。2つの選択肢の好ましさの程度には明確な違いがあることが、予備調査で確認されていた。選択は5人同時ではなく1人ずつ順番に行うこととし、すべての参加者が4番目に割り振られた。参加者は自らの選択に先立って1~3番の参加者の選択をPCモニター上で確認したが、このとき、3人全員が本来好ましくないはずの選択肢 (味が劣る水) を選択していた (但し、これらは実験者によってあらかじめプログラムされたものである)。こ

うした他者の選択を観察したうえで、参加者は自らの選択を決定した。最後に参加者は、5番目の参加者の選択行動をモニター上で観察したが、それは先の3人とは異なり、本来好ましい方の選択肢(味の良い水)を選択するというものだった。以上の手続きを通して、本研究では、「不気な規範」が先行の3人に共有されている状況を実験的に作り出すとともに、それを観察した参加者が3人の選好についてどのような推測を行うかを確認し、さらにその推測がその後の参加者自身の選択行動にどのような影響を与えるかを検証した。また、規範からの逸脱者(5番目の人物)に対して参加者自身ならびに他者が抱く評価等についても併せて検討した。参加者は大学生・大学院生50名(うち女性19名;平均年齢21.8歳)であった。参加者の匿名性は保護され、参加および継続が自発的なものであることを知らせた。

(3) 自己と他者、個人と社会環境の相互作用を通じた共有信念の形成過程(発展的テーマ)

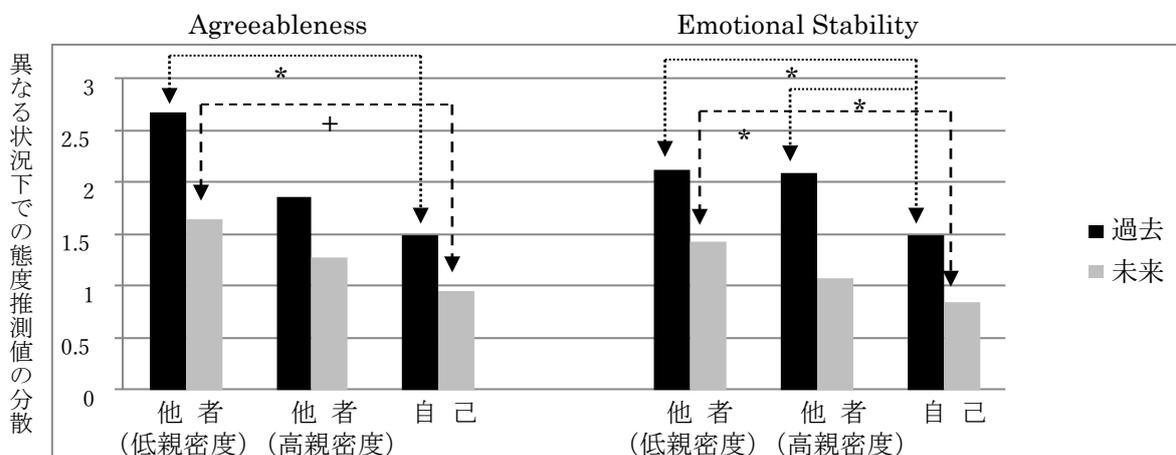
Web社会調査の方法を用いて、回答者がこれまでに身を置いてきた教育学習環境における課題の選択肢の多さ・課題変更の容易さに関して一連の質問を行った。具体的には、小学校～高校における教科選択の幅の広さ、進路選択の自由度、転職の容易さなど、人生におけるさまざまな課題の選択肢の多様性と、一度選択した課題を変更することの容易さ、また、努力を継続することや適性を探索することに対する他者からの期待や評価、社会的圧力の強さがどの程度であったかを尋ねた。さらに、個々の回答者を取り巻くこうした社会環境の特質が、その回答者の持つ暗黙理論や、それに基づく成功や失敗の原因帰属のしかた、失敗後の課題への取り組み方をどの程度規定するかを検討した。調査対象者は20～29歳の日本人500名(男女各250名)。調査はインターネット調査会社に委託し、高校卒業以上の学歴を持つ者をスクリーニングしたうえで実施した。

4. 研究成果

(1) 自己と他者の社会的距離と態度の一貫性の認知との関連

4つの異なる状況における行為者の態度の推測値について、状況間の分散を算出し、それをBig Fiveの因子ごとに平均して従属変数とした(分散が小さいほど、行為者の態度の一貫性が高く認知されていることを示す)。予備的分析の結果、時間的距離の遠近による有意な効果は見出されなかったため、この変数については以降の分析では扱わないこととし、時制(過去・未来)、行為者との社会的距離(自己・他者)、態度の次元(Big Fiveの各因子)を独立変数とした分散分析を実施した。その結果、時制($F(89, 1)=40.05, p<.001$)、社会的距離($F(89, 1)=9.40, p<.01$)、態度次元($F(356, 4)=40.62, p<.001$)の主効果、および社会的距離と態度次元の交互作用効果($F(356, 4)=3.85, p<.01$)が有意であり、状況の違いを超えた態度の一貫性の認知は自己よりも他者の行為に関する推測の時により大きく、また未来よりも過去の態度についての推測の時により大きいことが見出された。

次に、社会的距離の変数を自己/他者ではなく親密度の高い他者/低い他者との間での比較に置き換えて、同様の分析を行ったところ、時制・社会的距離・態度次元の3要因の交互作用効果について有意に近い差の傾向がみられた($F(352, 4)=2.05, p<.10$)。下位検定の結果を踏まえ、典型的な差の見られた協調性(Agreeableness)と情緒的安定性(Emotional Stability)の評定値の結果パターンをFigure 1に示す。概して、実験参加者が社会的距離の遠い他者よりも近い他者に対して、状況を超えた態度の一貫性を予測していること、また自分自身の(特に将来の)態度については、さらに強固な一貫性を予測していることが示された。以上の結果は、態度の一貫性の推測に関する解釈レベル理論による従来の知見が社会的距離の変数については必ずしも当てはまらないことを示すとともに、自己、親密な他者、疎遠な他者という連続的な自己-他者理解の枠組みが存在し得ることを示唆している。

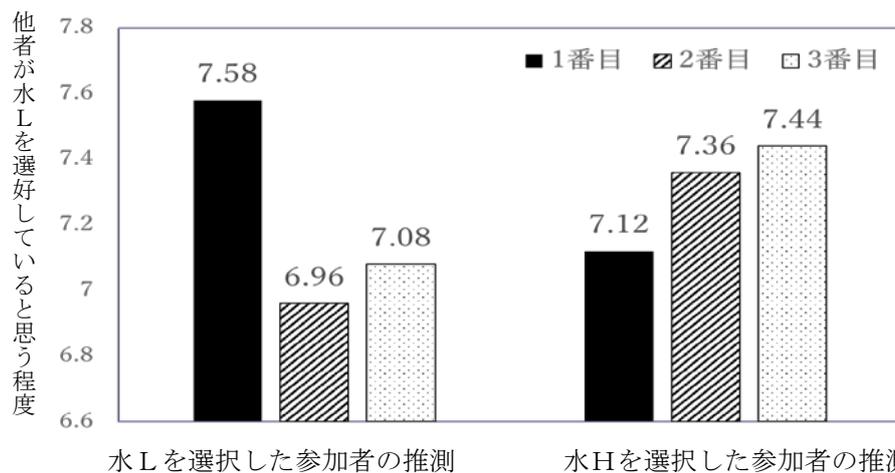


Note: 分散の値が大きいほど、一貫性が低く認知されていることを示す。* $p < .05$, + $p < .10$

Figure 1. 行為者との社会的距離と推測された態度の一貫性 (Muramoto & Yamada, 2017)

(2) 他者の選好・評判に関する誤推測の連鎖と、その帰結としての多元的無知

この研究では、水の品質を評定するという課題を設定したうえで、「味の劣る水を高品質な水として選択すべし」という規範を実験室内に作り上げた。そのうえで、規範に従ってふるまう実験参加者とそうでない参加者とが、それぞれ他者の選好をどのように推測しているかを検証した。具体的には、推測された他者の選好を従属変数とし、実験参加者が選択した水の種類と選好推測の対象（1番目・2番目・3番目）を独立変数とした2 要因分散分析を行った。その結果、Figure 2 に示す通り、有意傾向の交互作用のみが見られた ($F(2, 94)=2.97, p<.10$)。単純主効果の検定を行ったところ、本来好ましくない選択肢(味の劣る水=水L)を選択した実験参加者に限って、選好推測の対象の主効果が見られ ($F(2, 94)=2.74, p<.10$)、「2番目・3番目に評定を行った参加者は、1番目に評定を行った参加者ほど水L を好んでいない」との推測がなされていた。言い換えれば、「2番目の参加者は1番目の参加者に同調し、3番目の参加者は1・2番目の参加者に同調しているが、彼らは本心では規範を支持してはいない」と推測する者ほど、却って水Lを選択する、すなわち規範に沿って振る舞うことが示された。こうした結果は、他者の行動と選好の間にギャップがあると認知した参加者が、そのギャップから「規範」の存在を察知し、それに従った行動をとることが望ましいと判断するに至るというプロセスを示唆している。



Note: 水L=予備調査で味が劣るとされた水；水H=予備調査で味が良いとされた水

Figure 2. 参加者に先立って選択を行った他者の選好の推測 (岩谷・村本, 2017)

(3) 自己と他者、個人と社会環境の相互作用を通じた共有信念の形成過程 (発展的テーマ)

回答者の年齢・性別・子どもの頃に抱いていた能力観 (暗黙理論)、子どもの頃の経済状況などを統制したうえで、小学校・中学校・高校での授業の形態や与えられた課題の性質、教師や親の期待などが現在の回答者の暗黙理論に及ぼす効果を重回帰分析で検討した。その結果、生徒が自主的に課題を選び、考えたり調べたりする授業を多く経験したことや、父親が子どもに対して、何か一つでも自分の得意なことを見つかったり磨いたりすることを期待していたことなどが、回答者の実体的信念の規定因となっていることが見出された。逆に、小学校の先生が児童に対して「できない科目をなくすこと」を求めていること、母親が「失敗は人を成長させてくれる」という信念をもっていたことなどが、回答者の増加理論的な信念の規定因となっていることもわかった (分析継続中)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 10 件) ※すべて査読有。

- ① 正木郁太郎・村本由紀子. 性別ダイバーシティの高い職場における職務特性の心理的影響: 仕事の相互依存性と役割の曖昧性に着目して. 経営行動科学 30 巻 3 号, 2018 年, 133-149 頁.
- ② 今瀧夢・相田直樹・村本由紀子. リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響: 失敗した成員に対する評価に着目して. 社会心理学研究第 33 巻 3 号, 2018 年, 115-125 頁.
- ③ 鈴木啓太・岡蒼透・村本由紀子. 実体理論者が努力を重視するとき: 他者の能力評価における評価者の暗黙理論と努力情報の効果. 人間環境学研究 16 巻 2 号, 2018 年, 83-88 頁.
- ④ 正木郁太郎・村本由紀子. 多様化する職場におけるダイバーシティ風土の機能、ならびに風土と組織制度との関係. 実験社会心理学研究 57 巻 1 号, 2017 年, 12-28 頁.
- ⑤ 岩谷舟真・村本由紀子. 多元的無知の先行因についての検討: 他者の選好推測に注目して. 実験社会心理学研究 57 巻 1 号, 2017 年, 29-41 頁.
- ⑥ Yukiko Muramoto and Kazuki Yamada. The effects of psychological distance on dispositional attribution in Japanese culture. In M. C. Gastardo-Conaco, M. E. J. Macapagal, & Y. Muramoto (Eds.), *Asian Psychology and Asian Societies in the Midst of Change*. Psychological Association of the Philippines, 2017, pp.101-125.

- ⑦ 岩谷舟真・村本由紀子. 規範遵守行動を導く2つの評判: 居住地の流動性と個人の関係構築力に応じた評判の効果. 社会心理学研究 33 巻 1 号, 2017 年, 16-25 頁.
- ⑧ 岩谷舟真・村本由紀子・笠原伊織. 評判予測と規範遵守行動の関係: 関係流動性に着目して. 社会心理学研究 32 巻 2 号, 2016 年, 104-114 頁.
- ⑨ 岩谷舟真・村本由紀子. 多元的無知の先行因とその帰結: 個人の認知・行動的側面の実験的検討. 社会心理学研究 31 巻 2 号, 2015 年, 101-111 頁.
- ⑩ 正木郁太郎・村本由紀子. 組織コミットメントが組織学習に及ぼす影響について. 社会心理学研究 31 巻 1 号, 2015 年, 46-55 頁.

[学会発表] (計 26 件) ※以下、一部抜粋。

- ① Yukiko Muramoto. Effects of institutional factors and leadership structures on workplace norms and employees' work attitude in Japan. The 24th Congress of the International Association of Cross-Cultural Psychology, Guelph, Canada. July 5 2018.
- ② Shuma Iwatani, Kazumu Takahashi, & Yukiko Muramoto. Social mobility and the fear of bad reputation. The 29th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada. June 30 2018.
- ③ Keita Suzuki & Yukiko Muramoto. The effects of implicit theories and task-switching cost on individuals' performance of a task. The 29th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada. June 29 2018.
- ④ Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto. Pluralistic ignorance about inclusive climate in organization: The effects of personal attitudes toward diversity and the estimated attitudes of others. Presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan, Aug 2 2016.
- ⑤ Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto. The effects of relational mobility on reputation estimation and normative behavior. Presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan, Jul Aug 2 2016.
- ⑥ Yukiko Muramoto. Effects of informal evaluation and feedback in daily communication on employees' work motivation. Presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, Jul 29 2016.
- ⑦ Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto. The effects of workplace diversity and inclusive climate on employee morale in Japan. Presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, Jul 27 2016.
- ⑧ Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto. Antecedent conditions of pluralistic ignorance: An experimental investigation on preference estimation and normative behavior. Presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, Jul 25 2016.
- ⑨ Yukiko Muramoto. The multiple effects of psychological distance on the perception of consistency. Presented at the 11th Conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu, Philippines, Aug 22 2015.
- ⑩ Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto. When workplace diversity becomes a positive motivator: Various effects of organizational climate on diversity. Presented at the 11th Conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu, Philippines, Aug 21 2015.
- ⑪ Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto. An experimental investigation on the antecedent conditions of pluralistic ignorance. Presented at the 11th Conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu, Philippines, Aug 21 2015.

[図書] (計 1 件)

- ① Maria Cecilia Gastardo-Conaco, Ma. Elizabeth J. Macapagal and Yukiko Muramoto (Eds.). Asian Psychology and Asian Societies in the Midst of Change. Psychological Association of the Philippines, Quezon City, Philippines, 2017, 304 pages.

[その他] ワークショップ企画 (計 1 件)

- ① 正木郁太郎・村本由紀子. 日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会・ワークショップ「企業組織研究の最前線が抱える困難と可能性: 研究者と実務家, 双方の視点より」(企画), 東京大学. 2017 年 9 月 30 日.

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 正木 郁太郎 岩谷 舟真 鈴木 啓太
 ローマ字氏名: (MASAKI Ikutaro) (IWATANI Shuma) (SUZUKI Keita)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。